第22回「ことば」フォーラム

現代の外来語

2004年8月28日(土)

東京ウィメンズプラザ

田中　牧郎（国立国語研究所）

佐竹　秀雄（武庫川女子大学）

鳥飼　玖美子（立教大学大学院）

独立行政法人　国立国語研究所

● あいさつ・趣旨説明

山田　お時間になりましたので最初にいくつか御案内を申し上げます。お手元に，水色の封筒をお渡ししましたが，その中に，「現代の外来語」という資料が入っております。今日は３人の先生方の発表と質疑・応答で４時半までを予定しておりますが，おそらく３時ちょうどぐらいまでで，一度休憩をとる予定でおります。その次に，「分かりにくい外来語」という題の資料が，ホチキス(ステープル)で止めたものがあります。これが今日の資料で，３人の先生方の資料が一つになっております。その次に，小さな紙が入っております。これが，質問票になっています。これを休憩が終わるまでに，その辺りにおります係の者が，名札を付けておりますので，渡してください。この中身を拝見して，後半の内容に活かしたいと思っております。それからその次に，黄色の紙が入っておりますが，これは全部終わって最後にアンケートとして御意見をお書きください。私どもは，今回 22 回目の「ことば」フォーラムをやっておりますが，毎回の皆さまの御意見，御感想をなるべく次に役立てたいと思っております。いいことばかりではなく悪いこともたくさん書いていただきたいと思います。これは，お帰りの際に入り口の者にお渡しください。その後に，新聞などで発表しております「外来語の言い換え提案」の資料がございます。それが厚いものです。少し重いですが２冊あります。その後に，広報紙「国語研の窓」，私ども研究所の概要を入れてあります。もし足りないものがありましたら係の者にお申し付けください。それから今日は，お二人の手話通訳の方が入ってくださっています。その横には同時字幕も試みております。同時字幕は，人が私の声を復唱して，それを機械が変換をするということをしますので，時々ワープロの文字化けのようなことが起こりますが，どうぞ御了承ください。それでは時間も過ぎましたので御案内したいと思います。第 22 回「ことば」フォーラム「現代の外来語」を始めます。はじめに，国立国語研究所所長，甲斐睦朗より御挨拶申し上げます。

甲斐　このたびは，東京ウィメンズプラザにおいでくださいましてありがとうございます。私ども国立国語研究所が「ことば」フォーラムというのを始めて，今回で 22 回を数えます。１年に５回ずつ行っております。このように青山にまいりましたのは初めてでありまして，大変よい会場だということで，感謝しております。私どもは実は２年前から，もう３年になるんですが，「外来語の言い換え提案」というものを行っております。現在，第３回の中間発表にこぎつけているわけですが，第１期として４回までを考えようと思っております。そして来年の３月には，第４回を完了しようと思っています。それを第１期とするというふうに計画を立てているところであります。その一つの発表として，今回の「ことば」フォーラムを用意いたしました。今日の講師としましては，お一人には外来語委員会の鳥飼玖美子委員にお願いしております。鳥飼先生は，同時通訳の

専門家であり，またたくさんの御著書もおもちの方でありますが，そちらの方面から今日は，よい話をしていただけるのではないかというふうに思っております。もう一人がかつて国立国語研究所の研究員であり，今は武庫川女子大学の教授である佐竹秀雄先生であります。佐竹教授は，角川文庫には「佐竹さんの」という名前が付いておりますが，「さん」というのがふさわしい，大変穏やかな感じの先生であります。新聞等に使われている外来語の現状について，いくつかの見識をお話しいただけること，大変楽しみにしております。それから，国立国語研究所の外来語の委員会には事務局があって，そこで外来語のいろいろな問題を担当している田中牧郎が最初に，解りやすい言葉という立場から外来語について，お話をすることになっております。私どもは「ことば」シリーズという普及広報の本を作っております，本日は，外で，政府刊行物センターがそれを中心としたものを販売してくださっております。これもありがたいことだと思っております。国立国語研究所はできて今年で，56 年を迎えるところでありますが，来年春早々に立川に移転いたします。その後は立川でばかりするわけにはいきませんので，こちらのように便利のよいところで，こういう発表会もしたいというふうに思っております。そういう点で，この青山の会場というのが大変よい会場ではないかと思っております。これから３時間近くになりますが，どうぞ積極的に御質問をなさるなどして，今日の「ことば」フォーラムを充実したものにしていただきたいというふうにお願いいたします。また会場には，以前，東松山で開催したときにお世話いただいた方，また外来語委員会の方とか，いろいろな方がお見えでございます。これも大変ありがたいことだと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。以上で挨拶を終わります。

山田　実質的には３時間を切りますので長いなあと思わずにどうぞいてください。申し遅れましたが私が司会を行います，国語研究所の研究員の山田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。早速，田中牧郎から最初の発表をしていただきましょう。ではお願いいたします。

●「分かりにくい外来語」田中　牧郎　　　（配布資料：p. １～３）

田中　国語研究所の田中と申します。私は国語研究所の外来語委員会で，作業部会というところで，外来語委員会の検討のためにいろいろなデータ・情報などを整理して提供する，そういう役割を担当しております。今日は，外来語委員会でさまざまな情報を集めて議論をしております中から，いくつかのデータを紹介しながら，言い換え提案の基本的な前提になっていること，そして，言い換え提案がどういう趣旨でどのように行われているのかというようなことを，短い時間ですが，御紹介したいと思います。国語研究所では外来語に関していくつかの調査をしています。その一つに，外来語に関しての意

識調査というもの，全国 4500 人を対象にしまして面接調査を行ったものがあります。その結果は国語研究所のホームページで公開しておりますが，その中に，外来語を使うことの良い点，悪い点ということを聞いた項目がございます。今日はそのうちの悪い点，どのようなものが悪いのかという点について，そのデータから御紹介したいと思います。御覧いただいていますように，一番多かったのは，相手によって話が通じなくなる。そして，２番目に多いのが誤解や意味の取り違えが起こるというという答えです。これは，今日テーマにしておりますいわゆる分かりにくさということになるかと思いますが，外来語がよくないと考えている方のその理由は，一番多いのは分かりにくさという点にあることが分かります。もう一つ悪い点は，日本語の伝統が破壊される，こういう考え方の方もいらっしゃいますが，それは３番目。それよりも，分かりにくさということが問題だというふうに感じている人が多いということが分かります。では，どのような外来語が分かりにくいかということを言葉の分野で聞いてみますと，一番多かったのはコンピューター関連。そして同じ程度で，政治・経済，と続きます。そして，10%程度下がって，医療・福祉。こういう形です。この三つの分野が，他と比べて圧倒的に多い。ファッションとか音楽とかスポーツとか料理以下のこの四つの分野についても，実態調査をしますと外来語が使われていますが，その分野に関しては分かりにくいと感じている方は非常に少なくて，コンピューター，政治・経済，医療福祉ということに関しての分かりにくさを意識しています。では，その分かりにくい外来語で，言い換えをしたいのはどういう分野ですか，と，こういうふうに聞きました。そうしますと，先ほど１位だったコンピューター関連は３位になりまして，政治・経済，これは，コンピューター関連とほぼ同じ程度に，分かりにくいという人は多かったのですが，これが１番目。そして，先ほどの分かりにくい分野で，第３位だった医療福祉がその政治・経済と並んで２番目に上がってきます。こういう形で，例えばコンピューター関連に関して分かりにくいと感じている人が多いのですが，言い換えてほしいかというと，政治・経済，医療・福祉に比べるとやや低くなっています。逆に医療・福祉は，分かりにくいと感じている人は，政治・経済，コンピューター関連より少ないけれども，言い換えてほしいという，そういう希望はコンピューター関連よりもかなり多くなっているということです。ですから，分かりにくいというふうに感じている意識と，それから，言い換えてほしいというふうに感じている意識が，並行する部分もありますが，分野によって，言い換えの必要性の高いものと，それほどではないものがあるということが，このデータから分かるのではないかと思います。ほかに国語研究所では，「外来語の定着度調査」というものをしています。これは具体的に外来語を取り出しまして，その言葉を，見たり聞いたりしたことがあるか，あるいは意味が分かるか，あるいは使うかということを面接によっ

て聞いた調査結果が出ておりますが，これの質問文はここに示しました。１，２，３と並んでおります言葉のリストを見せまして，一語一語を聞いていくんですが，ここに挙げた１番から 30 番までの言葉を聞いたことがあるか，見たことがあるかと聞きます。これは認知したことがあるかどうかということで，認知率ということで申しておりますが，そこの回答で「ある」と答えた方には，ではその言葉の意味は分かりますか？　ということを２番で聞きます。そして，その答えとして「分かる」という選択肢，それから「何となく分かる」という選択肢，それから「分からない」という選択肢。この三つのいずれかから選んでもらいます。「分かる」「何となく分かる」という方には，３番では自分でその言葉を使ったことがあるかどうかを聞きます。これを１番が認知率，２番が理解率，３番が使用率という形で，統計をとりまして，さまざまな分析にかけています。このグラフ（資料 p. ２）は，横軸に認知率です。先ほどの問いの１番です。「見たり聞いたりしたことがある」。そして縦軸に理解率，２番目の問いで「分かる」「何となく分かる」というふうに答えた方です，例えば，この点にある言葉は，認知率が 60 数%，そして理解率が 20%程度，というふうに読んでいきます。ここに 300 数十の点がありますが，こういう形で認知率と理解率の掛け合わせでどんな位置に言葉があるのかということを見てもらいます。こういう軸の交差点がその認知率と理解率が等しくなるところですが，御覧のように，認知率よりもかなり低いところに理解率があることが分かります。だいたいこのように右上がりになるのですが，真ん中あたりが下に膨らんでいるということが分かると思います。こういう認知率と理解率との相関で，理解率の高い低いが必ずしも認知率と相関するだけではなくて，語によって真ん中あたりに膨らみが出てくる。よく見聞きするけれども，理解率は低い，よく分からないというものもかなりありそうだということが分かっていただけるのではないかと思います。いくつかのパターンで見てみますと，例えば，この青で○をした部分ですが，理解率が非常に高いものです。そして，次に左下のほうに，薄い青で囲んだところ，これは，理解率が非常に低い言葉です。そして，理解率が高い言葉はどういう言葉かと言いますと，「ストレス」に始まるように，これは一番認識率が高かった言葉ですが，誰でも知っている外来語，そして日本語には十分定着した外来語と見られる言葉です。次に理解率が低かった，左下の○を付けた部分ですが，おそらく分かる人は非常に少ないのではないかと思います，「キュレーター」「オーセンティシティー」に始まり，おそらく誰にも分からない外来語。そして，おそらく日本語になっていない，外国語と言っていいような言葉と思われます。先ほど少しだけお話ししましたが，黄色の○で囲んだところは，認知率は高いけれども理解率はかなり低いタイプの言葉です。これはどういう言葉なのかと言いますと，「アセスメント」「アナリスト」，こういうタイプの言葉です。これはよく見か

ける言葉だと思います。ところが分かっているかと聞くとやはり分かっている方が少なかった言葉です。見聞きするけれど「分からない」外来語，そして「何となく分かる」，というこういう二つの選択肢を先ほど２番の理解率の調査で示しましたが，このグラフでは，認知率と理解率の相関の左側のグラフとよく似た形をしていますが，その真ん中あたりの膨らみが若干小さくなっています。しかし，小さいながらも膨らみがあります。その辺の言葉，「何となく分かる」という回答がこれにどのような言葉が入っているか，これを見ますと，先ほどの「よく見聞きするけれど分からない外来語」と似たような言葉が出てきていることが分かっていただけるのではないかと思います。左側はその「見聞きするけれどもよく分からない」との答えが多かった外来語です。右側は「分かる」という人と，「何となく分かる」という人とを比べてその中で，「何となく分かる」という人が多かった。つまり，本当に分かると自信をもてる人が少ないという言葉ですが，この左と右とを比べますと，大体同じような言葉です。それぞれに小さく※印を付けたものが左側の「イノベーション」と「インフラ」，右側の「インサイダー」と「テクノポリス」これがそれぞれに入っていませんが，それ以外は，すべて重なっております。そして色を付けた，青くしたところがございますが，これは分野別で言いますと，いわゆる政治・経済の分野で使われる外来語ということになります。やはり政治・経済，先ほど最も分かりにくいという意識が高かったもの，そして言い換えてほしいという要求が高かったもの，この部分に分かりにくい外来語が集中していることが分かっていただけるのではないかと思います。今いくつか具体的なグラフを示して御説明いたしましたが，分かりにくいということには三つあるということです。まずグラフの一番左下にあった「誰にも分からない」外来語。それから「よく見かけるんだけれども分からない」こういう外来語，そして，「分かるようだがはっきりと分からない」という外来語，外来語の分かりにくさというのはこのようにいろいろな類型があるということが分かっていただけるのではないかと思います。それぞれに外来語の問題について考えるときに，手がかりになることが多いのですが，今日はこのうちのＢの「誰にも分からない外来語」，この例を用いまして，どうしてこういう分かりにくい外来語を使うのかということをお話ししていきたいと思います。分かっている人が少ない外来語，一応 25%，４人に１人も分からない，この基準でＢの類型の外来語を取り出しまして，国の省庁が 2002 年に発行しました 30 種類の白書，たくさんあって 700 万字ほどになりますが，これについて，今Ｂといたしました，定着度調査で理解率が 25%未満だった言葉について使用頻度を調べますと，上位の 30 語は御覧の通りになります（資料 p. ３）。一番頻度が高いのは「イノベーション」という言葉でした。以下，「インフラ」「コンテンツ」と続いていきますが，この 30 語はどういうときに使われるのかということと，なぜ分かり

にくい外来語を使うのかということを少しだけ考えてみました。例えばその 30 語の中で「インセンティブ」「アクションプラン」「ポテンシャル」「スキーム」こういった言葉があります。これは調べてみますと，新聞などで使っているのを見ますと，たいてい政治家の発言とか，役人のコメントですとか，財界人の談話とかそういうものが引用されているところで使われます。そうではない普通の記事では，ほとんど使われることはありません。これは特定の集団，政治家や役人などそういう人たちの間だけで用いられる言葉です。こういう「集団語」というタイプの言葉があるということが分かります。それから，先ほど一番多かった「イノベーション」，２位の「インフラ」，そして「コンテンツ」。上位にこうした言葉が多いのですが，これらは，普通使わない言葉ですが「新奇語」という言葉を仮に当ててみました。新奇な言葉です。行政の世界ですので，さまざまな政策を施します。その政策の新奇性，いかに新しいかを示す理念とか，イメージを前面に打ち出せるこういう性格をもった言葉が非常に多いということが分かります。それから「ゲノム」。こういう科学の最先端の専門用語です。それから「グローバリゼーション」「ライフサイエンス」「アセスメント」。さまざまありますが，これは極めて専門性が高い「専門語」です。そして現代の日本社会において，重要な概念となっているものが，それぞれの専門の学術分野を通して，施策に取り入れられてたくさん使われています。こういう三つのタイプのものがあります。「集団語」「新奇語」，それから「専門語」と仮に分けてみましたが，この三つは，必ずしも一語一語，きれいに分かれるわけではありません。例えば「専門語」としました２番目の「グローバリゼーション」という言葉，非常に重要な概念を表している現代のキーワードだと思います。その重要概念が必ずしも専門用語としてではなく，一般の場面に，さほど専門性をもっていない意味として使われることもあります。そうなると，先ほどの「新奇語」となります。「グローバリゼーション」という新奇性，それを活かして使われるということもあるということです。特に「新奇語」と「専門語」の間は，一語一語については両方の側面をもっている。その言葉の用法においてその語が新奇性を活かして使われているのか，それとも専門性の高い重要概念として使われているのかということを，見極めていくことが必要になります。大まかな整理として，「集団語」「新奇語」「専門語」と，こういう性格をもって分かりにくい外来語を使われる理由というものを考えていくことができるのではないかと思います。では，こういう言葉を，分かりにくい言葉なので，発信者側でどのようにしていけばいいのかということを考えてみます。発信者側，行政を担当している人，行政の情報を一般国民や市民に伝える人，あるいは，行政の政策を報道する報道機関の人，あるいは，行政を政策として取り入れる前には各専門分野の専門家の研究あるいは議論がありますので，専門家というところも含めていいかと思いま

す。それぞれ，配慮すべき点があるかと思います。例えば「集団語」，これは政治家同士，役人同士，経済人同士などで話すときはいいのですが，そうではなく，一般に対して使うときに，例えば「アクションプラン」という言葉などを使わない，そういう配慮が必要かと思います。そして「新奇語」，これは新奇性とかイメージの斬新さ，そういったことを活かして，つい使ってしまうわけですが，本当にその言葉を使う必要があるのかどうか，別の言葉で十分表せる概念を，新しい言葉だからといってそのイメージで濫用していないか，そのあたりに注意すべきかと思います。そして「専門語」。これはやはり重要な概念だということで専門家が新しいものを取り入れるわけですが，現在はほとんど英語などから入ってきたものにカタカナを当ててそのまま日本語に取り入れてしまうのです。これだけ分かりにくいという意識が強いものですから，やはりまず，一番おおもとの専門家は，できれば訳語を当てられないかどうか，これを工夫するということです。そして日本語の中にそれに当たる日本語がなければ作るということも専門家では必要ではないかと思います。そしてカタカナ語としてそのまま取り入れる場合でも訳語を作って，それを使う場合も当面は，その言葉が何を意味するのかということきちんと説明する，こういう努力が必要だろうと思います。こういう前提に立ちまして，国語研究所では外来語の言い換え提案というものを行っています。先ほど所長が申し上げましたが，２年前から始まりまして，最初の検討結果を昨年の４月に発表しました。第２回を昨年の終わりに，第３回として２カ月前に 33 語を発表しました。来月第３回の本発表をする予定です。今日は，その外来語の言い換え提案の冊子をコピーしましたので第１回，第２回分についてお配りしています。新聞記事などで取り上げていただく場合は，言い換え語の一覧表のような形で出てくることが多いので，外来語と日本語の一対一の対応関係ということで御覧になっている方が多いかと思います。実際は，お配りした冊子の通り，一語一語についてさまざまな事情があります。先ほど，三つに整理したような言葉による性格の違いというものもありますので，そういうものを生かして一つ一つ提案しています。提案の対象としましては，今スライドがありますように，先ほど申しました発信者側，主に官庁，報道機関こういう公共性の強い組織，これがそれぞれの指針に基づいて言い換えや注釈など，工夫をした外来語を使う必要がある。そのための一つの指針として提案しているということです。具体的に，言い換え提案の冊子を御覧いただくとイメージが湧くと思います。「ガバナンス」これは，第３回の発表でお手元にございませんので，今日は下のもう一つの「ノーマライゼーション」，この例を御覧いただきたいと思います。第２回の冊子の 35 ページを御覧ください。１番目の見出しに☆印が付いています。これは先ほどの定着度調査で「意味が分かる」と答えた方

の，日本人全体での比率です。☆印が四つありまして，一つだけ黒くなっています。これは国民の４分の１の人しか分かっていない。つまり 25%未満の段階だということです。60 歳以上でも同様です。「ノーマライゼーション」という語に，「等生化」，そして「等しく生きる社会の実現」という二つの言葉を提案いたしました。「等生化」という言葉は作った言葉です。意味説明といたしましては「障害のある人も等しく生活できる」という意味です。手引のところにこの「ノーマライゼーション」という言葉に特有の事情を詳しく書きました。この言葉への理解を深めてもらい，分かりにくい外来語をどのように工夫して分かりやすくしていくかということの手引きを記載したものです。１番目，これからの社会の重要な概念になると考えられ，分かりやすい説明が必要である。 ２番目，これまで「共生」という言い換えられることが多かったのですが，ほとんど普及しておりません。その普及しない理由について書きまして，そして，「ノーマライゼーション」の意味，概念をそのまま移し替えることができる新語として「等生化」としました。新しい言葉も漢語で作った場合，話し言葉ではなかなかすぐ意味が結びつきません。そういうときは「等しく生きる社会の実現」のように，分かりやすい言葉で表現することが可能であるということです。以下，「ノーマライゼーション」の背景について説明しております。このような形で先ほどの「専門語」に類するところでありますが，本来は専門家，福祉の専門家に訳語も作っていただけるのがいいのですけれども，現在の日本の専門家は，概念の厳密性というものを重視しまして，そのままカタカナで専門語を日本語に導入するということが普通です，一番の発信元にある専門家のところで，適切な訳語を作って，そしてそれを日本に広めて，そしてその言葉とともに概念が定着していくということを目指していく必要があるのではないかということも言い換え提案では提案しているつもりです。その他の外来語の言い換えに関してはさまざまな留意点がございます。それは，この第１回，第２回の冊子の始めのほうに留意事項といたしまして，簡潔にまとめております。例えば，今開いている第２回の提案冊子ですと，１ページから３ページにかけて６項目に分けています。こういうことを意識しながら，個々の言葉の事情に配慮して，外来語の分かりにくさということに，発信者側に対して提案しております。以上で私の御説明を終わりにいたします。御静聴ありがとうございました。

山田　田中研究員からでした。実は私は国語研究所で質問を受けてお答えする役をやっております。この外来語言い換え提案の発表がありますと，新聞では，外来語があってその横にあまり見慣れない日本語が出ていて今日からこっちを使うことになったというような発表になっていて，それに対していろいろな御意見や御質問をいただきます。先ほどもあった「ノーマライゼーション」のお手元の資料のような手引とか，言い換えの語

例ですとか，用例説明のようなものも実は一緒に発表しておりまして，今日はそれも含めての国語研究所の言い換え提案の裏方からの発表として話してもらったわけです。今日の場はそればかりではなく，いろいろな立場から外来語の問題について，この場で話を出していただこうという目的です。次は神戸の武庫川女子大で教鞭をとっていらっしゃいます，そして，言語文化研究所というところの所長をしていらっしゃいます佐竹先生に言語生活の中からのお話をしていただこうと思っております。それではよろしくお願いいたします。

●「暮らしの中の外来語」佐竹　秀雄　　　　（配布資料：p. ４～５）

佐竹　こんにちは。佐竹秀雄と申します。最初に甲斐所長が御紹介くださったのですが，国立国語研究所の所員でございました。ただあまり仕事をしなかったせいでリストラされまして，16 年前から大学の教員をしております。日常の私たちのごく身近な言葉遣いについての分析というものを中心にやっております。その立場から今日もお話をさせていただこうと思っております。今日私の話しますことは，私たちの暮らしと外来語とのかかわりを考えようということがねらいなわけですが，そのために，私どものところでやっております調査について御紹介させていただきます。それから，外来語を使うということはどういう意味をもっているのかということについて整理をいたしまして，それらを踏まえた上で　外来語に対してどう考えるか，皆さまに押し付けるものではなく，私なりの考えをお話しさせていただこうと思っております。それではさっそくレジュメに従ってお話しいたしますので御覧ください。最初は外来語が私たちの生活の中にどのように入ってきているのかという調査を御紹介いたします。その調査といいますのは，1997 年から 2000 年くらいにかけて，まさに 20 世紀の世紀末ですが，そのときの新聞の調査をしております。新聞には１面とか経済面とか，各面がございます。その各面ごとに調査をしております。例えば１面ですと，大阪で発行されております「朝日」「毎日」「読売」の３紙から，１紙について１面から五つのセンテンスずつ，つまり１日 15 のセンテンスをとりまして，それを１年分調査いたします。そこでどのような言葉が使われているのかという調査をいたしました。今日はそこから外来語について御紹介させていただきたいと思います。「(１) 新聞の面別の調査」というタイトルを付けておりますので御覧ください。そこにスポーツ・生活，生活というのは以前は家庭欄という言い方が中心だったかと思いますが，ここでは生活面という言い方をしております。語数の多い順番に並んでおりまして，スポーツ面が一番多いです。6.9％ですから，100 語あったらその内の７語くらいが外来語だと見ていただければよいわけです。括弧内に 11.0 とあります。これは，人名，地名を入れた場合になると 11.0％ということです。一番少

ないのが１面なんです。かなり少なく，2.3%，固有名詞を入れましたら 3.0%ですね。この数字は皆さん，ピンとこないかもしれませんが，研究所が今から 50 年近く前に雑誌の調査をしているんですね。これは大規模な調査で，今でも信頼の高い数字として認められているのですが。そのときの結果では，外来語が３%ぐらいだったんです。それからしますと，新聞の１面ぐらいの感じが，昔の雑誌，50 年前の，正確には 48 年前の雑誌の調査結果と同じだということです。それから私たちの感覚で，近年，外来語が増えているという認識があると思います。それがどうでしょう。平均するのも変ですが，今回の調査では 5.6%ぐらいになるのではないでしょうか。増えているけれども，感覚としてはそんなものかな，という気もいたしますし，何とも言いがたいのですが，それが実態で，面によって随分違いますね。スポーツ面が 6.9%で，１面が 2.3%ですから３倍ですよね。まさにそのくらい違うということになります。それから「種類」というのは，使われている言葉について，どれだけの種類が出てきているかという意味です。スポーツ面では 993 種類，つまり，993 語使われております。生活面では 1299。約 1300 ですね。当然言葉をたくさん使っていれば種類も増えていくはずなのですが，スポーツ面のほうが 1000 語で，生活面のほうが 1300 語で多いわけです。どういうわけかと言いますと，スポーツ面ではたくさん使っているのですが，同じような言葉を何度も使っているということであります。確かにスポーツ面ではそんなにはいろいろな言葉は出てこないのかもしれません。それに比べれば生活面では 1300 語で一番多いのです。生活面というのはいろいろな言葉が出てきているのだなということが感じられるわけです。そのあとの二つ目の表を御覧ください。二つ目の表は，今度は各面ごとにどういう言葉が多かったかというのを示したものです。ここでクイズです。（ａ）（ｂ）（ｃ）と空欄にしてあります。あと「社会」「１面」「投書（欄）」とあります。したがって「スポーツ」と「生活」と「経済」がこの（ａ）（ｂ）（ｃ）のどれかに当たるのですが，さて皆さん当ててみてください。当てるも何も，見当がつくかと思います。実はこの表はごちゃごちゃといろいろ印が付いておりますが，アンダーライン，下線を引いてあるのがありますね。その線が引いてあるのは，実はその面に多いけれども，他の面には多くなかったというものです。例えば（ａ）の「リーグ」はこの面にはたくさん出るのですが，（ｂ）や（ｃ）や１面と社会面にはあまり出なかった言葉です。というふうに，そういう語を見ていきますと多分，見当がつくと思います。見ていきましょう。「リーグ」「プロ」「サッカー」。もうお分かりですね。ここまでくると「オリンピック」「シード」だとか言うまでもなく，これはスポーツ欄です。（ｂ）の上のほうは何も付いていません。「サービス」「インターネット」では分かりませんね。「ネット」「デジタル」「ベンチャー」「ビジネス」。ここまでくると分かりますね。経済面ですね，というふうになります。

ですから(ｃ)は生活面なんですけれども，逆にこの言葉から生活面と分かったかというと難しいのではないでしょうか。「センター」「センチ」「サービス」「ホーム」「ボランティア」「グループ」「ケア」とか。これで生活面だ！　と分かるのがなかなか難しいと思います。そういう意味ではちょっと，（ｃ）は(ａ)（ｂ)とは変わっているのかもしれません。言うのを忘れましたが，この１番目と２番目の，太い字で書いてある言葉がありますね。例えば(ｂ)の「サービス」に白の▽のマークが付いております。先のアンダーラインのものとは逆に，その面だけではなくあちらこちらの面に出てくる言葉にその印を付けました。「サービス」は(ｂ)で一番上ですし，(ｃ)では上から三つ目に「サービス」があります。社会面，ここにはないのですが，もう少し下にあります。１面のところではこの表の一番下にありますし，投書欄では真ん中あたりに「サービス」があります。「グループ」という言葉もあちらこちらに出ますし，「テレビ」という言葉に●が付いておりますので，目立ちますね。(ｂ)では下のほうにあります。社会でも下，１面では真ん中にあります。また，投書欄の一番上にあります。これがあちこち出てきます。太字でマークを付けた言葉というのが，いろいろなところで出てきて，私たちの身近な言葉と言えるものです。そういう意味では，身近な外来語であると言うこともできます。単位とか助数詞とか言われてまして，数字が付く言葉です。「何キロ」の「キロ」，「何万ドル」の「ドル」，「何センチ」の「センチ」ですね。これらもあちこちに出てくる言葉です。(1)の表と(2)の表を見ていきまして，何が考えられるかということでまとめてみました。そうしますと(1)のところで面によって数字が違いましたね。ということは面によって出てくる外来語の表れ方に差があるということが言えますし，２番目の表で言いますと，特定の面によく出たり，どこにでもよく出たりしてくる言葉があります。そういうことを考えますと，誰かさんの好きな言葉を借りますと，人生だけでなく『外来語もいろいろ」，ということになろうかと思います。それから，二つ目です。スポーツ面というの，クイズとしては答えが分かりやすかったですね。それから経済面も分かりやすいということが特徴的である，と同時にほかのものとちょっと違うということが言えると思います。つまり，スポーツ面とか経済面とかは，やはり専門的なところがあるのですね。経済の難しい言葉というのが先ほど出ていました，分かりにくい外来語が多いと出てきましたが，これは専門性とかかわるのだろうと思います。あともう一つ，今回興味深いものがあります。私は最初に申し上げましたように，日常の言葉遣いというものを気にしておりまして，ごく一般の人たちの言葉ということで考えますと，生活面と投書欄というのが面白いところだと思います。生活面は，私たちの暮らしに必要な情報が書かれているわけです。私たちはそこから情報を得ます。一方，投書欄というのは，私たちの日常の情報発信をする，一般の人が発信する欄です。

まさに対照的なわけです。その対照的な二つが，実は外来語の面でも対照的だったということです。例えば（1）の表でいうと，生活は上から二つ目。２番目に多いわけです。それから投書欄というのは下から二つ目ですから２番目に少ないわけです。種類で見ますと，生活面は 1300 で一番多い。投書欄は 745 で一番少ないです。非常に対照的ですね。どういうことかと言いますと，私たちには新聞からいろいろな種類の外来語が押し寄せてきているわけです。ところが私たちが自分から情報を出すとなるとそんなに使っていないのですね。外来語をどう捉えるかというのは，いろいろ問題がありますが，もし外来語に問題があるとしても，押し寄せてくる割には私たちが使っているものは少ない。一般の人たちが使う外来語の使い方というのはかなり健全で，冷静なんじゃないかと思います。ここからそういうことが言えるのではないかなと思います。私たちはそんなに外来語はめちゃくちゃな使い方をしていないんだと個人的には自信をもっていいと思います。そういうことが実際の外来語調査から見えることでした。次に２枚目（資料 p. ５）を御覧ください。これからは，すでに言われていることを少し整理してみました。外来語がいい点といいますか，なぜ使われるのかということです。何か意味があるから使っているんですよね。それについて，こういうことが言えます。一つは，それまで日本になかったものが入ってきたとき，例えば，そこに挙げましたが，「ガラス」や「ラジオ」，「パン」といったものが入ってきたら当然その名前がいるわけです。そのときにそれまでにあった日本の言葉を利用して和語とか漢語とかを使うのではなくて，外国語をそのまま取り入れようとした，それを外来語として取り入れる。それは具体的な「ガラス」や「ラジオ」などでなくても，抽象的な概念であってももちろん構いません。最近の例で言うと，「ネットワーク」や「インフォームド・コンセント」などもそういうものだろうと思います。日本は特に縦社会と言われており，今までになかった「ネットワーク」などという横のつながりを示すような言葉には，なかなかいい翻訳の言葉がなかったのかもしれません。だからそういうものが入ってきたということです。それから二つ目は，それまでに日本になかったわけではないが，同じような，似たようなものがあったがそれではちょっと，というときに，新しさを出したい，その違いをもう少し明確にしたい，といったときに外来語を使った。名付けと言いますか，そういうものがあります。「キャリアウーマン」という言葉はだいぶ久しくなりましたが，さらにそれ以前では「職業婦人」という言葉があったわけです。「職業婦人」でもいいわけですが，どうも「職業婦人」ではなんとなくというのがあるわけですね。そうすると「キャリアウーマン」にしたい，このほうがいいという言い方がされたりします。それから最近ですと「ガーデニング」ですね，これは，「園芸」とどう違うのでしょうか。私はよく分かりませんが，「あなたの趣味は？」と言われると，「園芸です」と答えたら，何かお

じんくさいと言われそうですね。しかし「ガーデニングやっていますのよ」と言うとおしゃれに聞こえる。そういう意識があるんだろうと思います。「リフォーム」にしてもそうかと思いますが，おしゃれとか新しいとか，ときには高級なイメージがあるとか，いわゆるよいイメージをもっている，というのが，その外来語が使われる大きな理由の一つだと思います。当然そういうのは商品名とか会社名にも，最近変わってきましたが，「何とかむいちゃいました」とかいろんな変な名前がありますが，やはり外来語志向というのは基本的に続いているわけだろうと思います。このイメージ戦略と言いますか，イメージのために外来語を使うというのは，またあとで申し上げますが，かなり問題があると思っています。それからイメージの問題と似ているんですが，婉曲（えんきょく）表現として使うというのもよく言われています。そういうのがあからさまである，言いにくいというとき，例えば「便所」とは言いにくい，そういう場合「トイレ」と言うと，何となくぼかした気分になれるわけですね。また「性行為」というのではちょっと生々しくて言えないから「セックス」という言い方がある，この頃は「セックス」さえも生々しくなってきましたが，最近は「H」とか言ったりしているわけですね。基本的にやはり言葉というのは使っているうちに手垢にまみれてくると，イメージが悪くなってきたりします。そういうときに手垢にまみれないという意味では外来語というのはやはり便利なんですね。最初の段階は，みんなあまり知らない言葉ですから，そこに印象がこびりついていないから，要らない印象がこびりついていないわけですから，それを使って名付けに使えるということが行われてきたんだと思います。それから四つ目には専門用語として使う。先ほどのスポーツ欄だとか経済面にありましたように，その専門性とか，専門的な言葉として使われることがあります。ただしこれは専門として使われるから仕方がない，そういう言葉が必要なんだということで使われるのでしょうが，その一方でこれらも一般化することがあるわけです。そうすると専門の世界だけで済まずに，私たちの世界に外来語が入ってくる。例えば「アレルギー」「ストレス」は，医学用語なのでしょうが，例えば「アレルギー」などは「核アレルギー」などという言葉もありますし，人によっては「女性アレルギーがある」とかそういう使い方がされていくというわけです。ではその外来語は何が問題なのかということですね。これはすでに言われてることで，少し整理をしてみただけなんですが，それから先ほどの面接調査の結果のところでもいくつか出てきたことと重なると思いますが，まず第１に，外来語使用には世代間の差が認められるので，世代間のコミュニケーションの妨げになる。というのがあります。確かに外来語使用については年配の方より若い人のほうが積極的だという調査結果もあります。若い人がよく使う，そうすると当然年配の人はこの人は何を言ってるか分から

ない，そういう構図ができあがるわけですね。それはありうることだと思います。特に外来語に関しては，分からないものが多いというのもありますし，漢語のように漢字で書いていないので，カタカナでは手がかりがない，ということもあって，なかなか伝わりにくいということもあるようです。それから二つ目に，外来語を使うことは日本語の軽視につながり日本語の伝統を崩すことになる。これは先ほどの面接調査の中でいくつかかなりの割合を占めていたかと思います。これは私個人はあまり賛成ではありません。こういう御意見も確かにあるかとは思います。三つ目に，原語から外れた外来語使用や和製英語の濫用は，日本人の外国語学習の障害になる，というわけですね。確かに，外国語が日本に入ってきて外来語になった瞬間，瞬間と言いますか，外来語になっていくときに変形されるわけです。日本語風にアレンジされていくということがよく起こります。例えば「マンション」なんていうのもそうですね。もとは何か大きなものを指すようですが，日本では「ワンルームマンション」なんていう言葉もありますので，原語ではきっと訳が分からないと思います，本来の意味が分かっている人には。「ヴァイキング」などもそうですね。全く意味が変わってしまっています。そういうことは当然外国語を学習する際の障害になるという，さっきの表にも出ていましたが，そういったことがあるのも事実です。そういう一般的な批判意見があるのですが，それに四つ目を付け加えてみました。私が一番気になるのは，先ほどイメージが問題だと言いました。外来語で名前を付けていきますと，やはりイメージが重視される傾向が多いわけです。イメージを重視するということは，それは実質とずれが出てくる可能性があるわけです。最近ですと，商品名にしろ職業名にしろ，いわゆるカタカナ名前の職業というのでしょうか，「何とかプランナー」とか「何とかクリエーター」とか訳の分からないことを付けていると何か意味ありげに見えるとか，かっこよく見えるとか，そういうイメージ戦略のような名付けですね。そういうことだと実際とずれがあると言えますね。求人案内などを見ていますと「フロアレディー」というのがあります。私は応募できませんが，どうやらアルコールの出るようなところで接客をするような人のことのようですね。今までの職業と違っていないのに，いかにもそれらしい名前が付けられているということもあるようです。もう一つは，外来語の場合，意味がはっきりしないことに加えて，何となく軽さがありますね。特に長い外来語の場合，ここに「セクハラ」と書きましたが，短縮形と言うのでしょうか，短くされることがあって，そうなると，より軽さと言いましょうか，あるように思います。例えば「セクシュアル・ハラスメント」と言いますと重大な犯罪行為ですね。いけないことのはずなのに，それが「セクハラ」というと何となく軽くなってしまう。非常に軽々しくなってしまいます。今日，最初に私は自分がリストラされたと言いましたが，この「リストラ」だって違うわけですね。「リストラク

チャー」ということで「再構成する」。日本語化されて「首切り」みたいな言葉になりました。首切りだって重大な問題だと思いますが，私のように「リストラ，リストラ」と言って，軽々しく言葉を使っています。本質，実態からずれていくということが行われているのだと思います。そのときにみんな一緒にずれるかというと，その保証はありません。人によってずれが違ってくれば，当然認識の違い，誤解が考えられます。それはやはり大きな問題だと思います。こういうことを考えていきますと，外来語って一体何なんだといったときに，私はやはり使い方に問題があるんだと思います。決して外来語が悪いわけではありません。外来語そのものに罪があるわけではないので，外来語の使い方をどう考えるべきかということが問題になると思います。先に「外来語はいろいろ」と言いました。「外来語はいろいろ」なので，みんな同じよ，というひとくくりにできないだろうということです。だから外来語を使ってはいけない，使ってもいい，という，そういう乱暴な考え方はまずいだろうと思います。やはり個々の外来語を考えるべきだと思います。例えば，私たちが何かを表現するときには言葉を選んでいるわけです。どういう言葉を使うか選んでいるわけで，例えば単語のレベルでいうとそれが和語であったり漢語であったり外来語であったりするわけです。そういうときに，どういう言葉がぴったりしているのかと考えて選んだときに，外来語であれば，私はそれは何ら問題はないと思います。しかし外来語の認識というのは大事ですね。さっきのいい加減な認識で使うのではなくて，やはりその言葉がぴったりであるということを考えた上で使うのであれば私はいいと思います。逆にその言葉を受け取る立場であれば，やはり注意すべき点は，先ほど言いました，イメージ戦略にごまかされるなということです。冷静にその言葉の外側と中身と言いますか，外来語の外見的な効果と中身の実質との違いを混同しないで，冷静に受け止める必要があるだろうと考えるわけです。他方，先ほどの発表のお話の中でありましたが，専門家の立場というのも少し気になるわけです。それもやはり問題にしたいわけです。私たち一般の人間が外国語を取り入れ，外来語を使うのはまずないわけですね。外来語を取り入れ，使う立場の方は別にいる。また，外来語として広める可能性をもつ立場にある人が別にいるわけですね。例えばマスメディアとか研究者と書きました，何らかの専門家のような人たちというのは，やはりそういう方々の外来語に関して責任は重いと思います。そういう人々がその立場を十分に理解してほしいと思うのです。ただし，だからといって，私たちはどうでもいいのか，というとそうはいきません。もう一度改めて，そういうことを専門の方にお願いするとしても，どういう態度をとるべきかといったときに，私たちはやはり，自分の頭で考え，個々の外来語に対して，イエスかノーか，支持するか，しないかということを，やはりよく認識する必要があるだろうと思います。そのためには，結局は，私たちがもっと言葉遣い

に敏感にならないといけないだろうと思います。その言葉遣いが，どうでもいいんだ，何でもいいんだ，ではなくて，その場面その場面で，その言葉がどういう効果を発揮してどういう力をもっているのかということを，もっと見極める力を十分に身に付けることが大事だ。我々としては言葉遣いにもっと敏感になることを，私自身の反省も含めて，是非そういう態度をとっていきたいと考えております。以上で私の話を終わります。ありがとうございました。

山田　どうもありがとうございました。今日のお話で，お気づきでしたでしょうか。佐竹先生は「私のレジュメに」とおっしゃったんですね。私たち国語研究所のフォーラムをやる者は，「レジュメ」は使ってはだめとか，資料と言ったほうがいいよ，というふうなことをわざとやっているんですが。これは，裏話です。５分ほど時間が長く延びましたので，15 分の休憩をとりまして，この時計で 20 分から再開したいと思います。場内を回っております札を付けた者に，質問票をどうぞお渡しください。では休憩にいたします。

＜休憩＞

山田　お待たせいたしました。質問がたくさん集まりまして，さばくのに時間がかかってしまいました。それでは後半のお話に進みたいと思います。「コミュニケーションの視点から見た外来語」，鳥飼先生にお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

●　「コミュニケーションの視点から見た外来語」鳥飼　玖美子

（配布資料：p. ６）

鳥飼　はじめまして，鳥飼玖美子です。先ほど甲斐所長からの御紹介にもありましたように，私は外来語委員でありますが，英語あるいは通訳を専門にしている者として，外来語をどのように考えるかという話をさせていただきます。外来語が増えているというのは，先ほどお二方のお話にもあったとおりで，なぜこのように増えたのかという，これもお二方の話でだいぶ詳しくありましたので，その辺は省かせていただきます。付け加えることがあるとしますと，多分，今は日本語の世の中ではなくて，英語の世の中なんですね。英語ができなければどうしようもない，これからの日本はどうしようもないということで，子供たちにも英語を教えようというところまでいっているわけで，これは文部科学省が先頭に立って，英語の使える日本人を育成するための戦略構想まで打ち出して，それは行動計画として 2003 年度から実施されているわけです。そうなりますと，あまり深く考えないまでも何となく，それこそ先ほど出ていましたイメージという言葉

がありましたが，イメージで，あるいは思い込みで，英語がこれから必要なんだ，国際的に英語が必要なんだということになりますと，何となくカタカナ語を使用すると，少し国際的に近くなったようなそんな幻想があるのではないのかというのが，私の勝手な推察です。そういう思いこみとは別に，カタカナというのは，なかなか優れものなんですね。どのように優れているかと申しますと，話は突然飛びますが，去年の冬だったと思います。私は，国際翻訳家連盟という団体の理事をしているんですが，その団体は世界中の通訳関係，翻訳関係の団体が，ほぼすべてが入っている大きな網羅的な国際連盟で，50 年前にユネスコの肝煎りでできた国際的な組織なんです。それが創立 50 周年を迎えたので，発祥の地であるパリのユネスコ本部で 50 周年記念大会が開かれ去年の 12 月に行ってまいりました。そのときの一番大きなイベントと言いますのは，『ハリー・ポッター』です。お読みになった方もいらっしゃると思います，あれは実は日本だけではなくて，世界的にベストセラーなんです。なぜ世界中であんなにベストセラーになったのが不思議なんですが，ともかく，ハリー・ポッターの翻訳をした各国の翻訳者たちを集めたシンポジウムが開かれたんです。そこでは，例えば，南アフリカですとか，セルビア語であるとか，アジアからはタイ語であるとか，マイナーな言語も含めて，さまざまな言語に翻訳した翻訳家たちが集まって苦労話をしました。その中で非常に面白かったのですが，異口同音にみんなが「難しかった」と言ったものがありました。それは何かと言いますと，ハリー・ポッターと言いますのは，魔法使いだと自分は気がつかないでいた男の子が，実は魔法使いのエリートの子供で，魔法使いの学校に行くんですけれども，登場人物が，普通の人間は普通の名前なんですが，魔法使いの血をもっている登場人物というのは，みんな変な名前をもっているわけです。ハリー・ポッターはハリーで簡単なんですが。学校の先生なんかも，ややこしい名前をもっていて，悪者もいれば善人もいるんですけれども，ともかく名前が，ちょっと変わっているんです。その訳に大変苦労したというふうに言っていました。その苦労したというのはなぜかというと，たとえば，タイの翻訳者のように，タイ語では，いくら外国語の名前であっても，それはそのまま使えないんだということです。すべてタイ語に訳すのがタイの翻訳の伝統である。昔，日本でも，「クララ」というのを「くら子」としたような翻訳もあったようですが，それと同じなんですね。タイ語としておかしくない名前に変えてしまうんだという言い方をしていました。ところが，その一方で，それに反論をした人が，若いセルビア人の男性の翻訳者だったんですが，あのハリー・ポッターに出てくる名前は，それぞれに非常に意味があるんだ，悪者を悪者なりにいろいろな意味を込めて名前を付けているので，それを何とか翻訳で出したいと思った，と言いました。非常に苦労をしたけれども，セルビア語で意味をくみ取って伝えながら，しかし，セルビア語の普通の人で

はないんですよ，ということを明示的にしたいので，そこでどうするのか，スペルをちょっと一文字変えて外国人っぽさを出す，というような苦労をしたんだという話をしていました。そのときに，私はふと「日本語は楽だな」と思ったんです。カタカナがある。カタカナというのは，記号としてみますと，音なのです。表意文字ではなく表音文字ですから，目からも音として入るわけです。しかも，よいことにひらがなとカタカナとありますから，日本人はひらがなを見ると和語ですね。でもカタカナの場合には，何かそこに異質性を醸し出すことができて，これは外国のものである，もともと外国のものだった，というようなことが残ることになるわけです。そのときのシンポジウムには，日本の訳者の松岡さんは参加していませんで，聴衆として聴いていらっしゃったので，私は，「はい」と手を挙げていただいて「カタカナという優れものがあるので，一切苦労しませんでした」というふうにおっしゃらないかなと思ったくらいです。日本語では，意味は伝わりませんが，一応そのままをカタカナで表記することによって，これは外国語の名前であるということは，出せるわけです。読む人はそれを感じとる。そういうことが非常に，使い勝手のよい発明だなあと思いました。でも，ということは，カタカナは使いやすいからどんどん使うわけです。外国からのものがきても右から左へと，どんどん使う。明治時代は”*Society*”という英語が入ってきたときに，これは日本語で「世間」と言ってしまってはどうも違う，もう少し近代社会という意味を込めたいというような思いもあって，先駆者たちは，散々頭をひねって「社会」という日本語を作ったということがどこかに書いてありましたが，今はあまりそういうふうに考えて工夫する人が日本にいなくなったんだろうと思います。先ほど，佐竹さんからは，ぜひ翻訳にあたって専門家がもう少し努力してほしいというお話がありましたが，世の中，忙し過ぎてしまって，多分そこまで呻吟（しんぎん）して日本語を探す，あるいは作り出すというエネルギーがないのではないでしょうか。あるいはカタカナで書いてしまうと，逆に受けがよいということもあるので，右から左へと今はもう”*Society*”は「ソサイエティ」とカタカナで書いてしまう。上流の「ハイソサイエティ」は「ハイソ」というような感じで縮めてしまう。短縮の話も先ほど出ましたが，あれは個人的には好きではありませんが，東大の柴田先生に言わせると，４文字に縮まったときに，その言葉は定着するんだということです。ということは，比較的気楽に，カタカナという存在をフル活用しながら外国の言葉を置き換えて，そしてそれを使っているうちに，だんだん縮めて使いこなしていくというのが，今の日本の言語状況かなという気がしております。しかも，それだけではなくて，効果があるんですね，カタカナには。一つには先ほど出ていましたが，語感がしゃれた，斬新な響きになる。同じことでもカタカナ語にして言うと，しゃれた感じに

なる。それからもう一つは，日本語のままで言うと身も蓋もないものでも，カタカナ語にすることによってこれも何か，ぼかされる。醜いものが，ぼかされる。あるいは，そのままではちょっとつらい，きついというものもぼかされる。「介護」と言うと，やっぱり何となく寂しいというか，つらい思い，どちらかというとあまり楽しくはないのですが，「ケア」というとスーッと軽くなるんですよね。「介護担当者」「介助者」と言うとちょっと重いのですが，「ケアマネジャー」と言うと，スッといってしまうということで，そういう効果もカタカナ語にはあるのかなということ。そしてもう一つ，これが，今度は使わなくてもいいところでも使うという，政治家や官僚などが使うというのは，ぼかすという意図もあるでしょう。もう一つよく見受けられるのが，専門用語というカテゴリーでカタカナ語が使われると，「ちょっとあなたとは違うんだ」「私は知っている」「この問題については専門家である」，周りの人に，分かっているようで分からないようなカタカナ語を使うことによって，自分が専門家であるというステータスを明示することができるという，そんな効果もあるのではないかと思います。そういうことで，どんどんカタカナ語にして使っていくのですが，やはり問題点はございます。私はいくつか「ハンドアウト」，配布資料ですよね，に書いておきましたけれども，一つは，理解を阻害する，もちろん世代間の理解が阻害されるということもありますけれども，一番の問題は，私は，当事者の理解が阻害されることであろうと思っております。例えば，先ほど，田中さんの発表でも，分からない外来語，そして，説明してほしい外来語に医療・福祉が第２位として出ているというお話がありましたけれども，医療・福祉というのは，我々にとって，本当に最も身近なものですよね。今，たとえ健康でも人間は必ず病気になったり，怪我をしたりするものですから，お医者さま，病院には常にお世話になるものですし，福祉というものだって，それはさまざまな形でいずれ必要になるものだろうと思います。つまり，我々全員が当事者になる可能性がある分野で，逆に，カタカナ語が多用されているというこの事態は，あまり歓迎すべきことではないように思います。例えば，新しい概念だからカタカナで入ってきたんだとされている「インフォームド・コンセント（センにアクセント）」という英語なんですけれども，これが日本語になりますと「インフォームド・コンセント（コンにアクセント）」と「コンセント」を差し込むというような感じになりますけれども，英語はどこにアクセントがあるかというのが重要で，意味が変わってくるので要注意ですが，そもそもこのカタカナ語句は長くて言うのも何となく言いにくい。どうしても 4 文字にならないし，中身も分かったようで分からないということで，外来語委員会では「納得診療」という言い換え語を出したわけです。これは，非常にいい日本語だというふうに，私は個人的に思っておりますけれども，実を言いますと，英語ではもう少し強い意味なんです。納得とい

うよりは，英語での「インフォームド・コンセント」というのは，必要不可欠な情報はすべて，よい情報も悪い情報も，聞きたくないものも聞きたいものも，全部ひっくるめて情報は全部開示してもらえる権利が患者にはある。その上で患者が手術をするとこれだけでのリスク，手術をしないで薬でいくとこういうふうになるというリスクも含めてすべてを聞いて理解した上で，それならば私の場合には思い切って手術を決断するかもしれないし，手術をやめて薬だけでいきます，これでいきます，あるいは全部やめます，家で静かにしますということもあり得るかもしれません。すべてを分かった上で自分が自ら主体的に選んで，選ぶのは医者ではなくて本人であるという，そういう強烈な権利意識なんです。それがカタカナ語で「インフォームド・コンセント」が今，流行っているみたいだから，というだけのことだと，それが医療側にも，それから医療を受ける立場の患者側にも十二分に理解されていないと，どこかで基本理念がゆがんできてしまって，誰が損をするかというと当事者なんです。ちなみに申しますと，「インフォームド・コンセント」がなぜ出てきたかと言いますと，第２次世界大戦中のナチの犯罪で，人体実験をしたという苦い反省から，こういうことがあってはならない，人間の体はその本人のものであるという強い意思表明から始まったと聞いております。それからもう一つの「インフォームド・コンセント」は，医療だけではなく，インタビュー取材であるとか，そういうことについても使われております。いろいろな研究にしても取材にしてもそうですけれども，誰かにインタビューする，その内容については，まずテープに録ったりビデオに撮るときには了解をとる，何のために使う，どこの部分を使っていいかということをすべて，アメリカの場合は文書にすることを勧めているくらいで，それをすべて分かった時点で，私のしゃべったことは何の目的で使われていつまで使われて，５年後にはこのテープは廃棄されるのかしないのかということもすべて分かった時点で，同意をしてインタビューを受けるという，そういう個人の権利意識の強さというものが，この表現から読み取れるということです。それから本質を隠すという意味では，先ほどの「介護」と「ケア」というお話もあります。時間がなくなってきますので，本質のほうは少しとばさせていただきまして，英語の話にいきたいと思います。私どもは英語を専門としておりますが，ショックだったことがありました。中間発表に対する一般からの意見を見ておりましたら，カタカナ語，外来語を使うことはいいことである，（外来語はほとんど英語なんです，フランス語がたまにあるくらいで，ほとんどが英語です，）なぜならば，英語はこれから必要だから，せめて外来語として英語を使って我々は英語力をつけなければならないという意見があったんです。私は「これはいけない」と思いました。外来語，つまりカタカナ語を使うことは英語学習につながるどころか，マイナスの要素のほうが大きいということを申し上げておかなければならないと思って

おります。まず，音からいきますと，先ほどの「インフォームド・コンセント」でありまして，「コンセント」でないと申しましたけれども，どうしても日本語では音が違うんです。モーラというか子音があって母音があって，そしてアクセントではなく音節でいく。英語の場合は完全に強勢でいくとか，どこを強める，どこを弱めるという，リズムでいく言葉ですし子音で終わる場合が非常に多い。そこに母音が入ってしまうとリズムが崩れる。例えば，「キャリアウーマン」，「職業婦人」だったのが，最近は「キャリア」になっているという，その「キャリア」ですけれども，昔は，大学の「就職部」などと言っていたのが今は「キャリアセンター」ですね，どこの大学もそう呼んでいます。「あの人はキャリアの外交官だから」と，職業外交官のことをそのように言います，「キャリア」と前の「キャ」にアクセントをおいて言ってしまうと，何かウイルスを運んでいる人のように聞こえますけれども，「専門性をもった職業」という意味では「キャリア」と後のほうにアクセントがある。それから，もう一つ「ユビキタス」というのがありますけれども，ホームページに投書がありまして，これは日本のコンピューター関係の造語だと思っている方が多いようです。けれどもこれはもともと英語で“*ubiquitous*”という，神がどこにでもいるというところから出てきた「普遍的な」という意味です。だから例えば「ユビキタス・ヴェンディング・マシン」は「どこにもある自動販売機」となりますけれども，全然コンピューターとは関係ないですね。ですけれども日本ではそれをコンピューターがどこでも自由自在に使える，どこにいても使えるという意味で使い始めたために，今やそれが固有名詞化されている。でも「ユビキタス」と言ってしまうと，英語を知らない人には，たぶん分からないだろうと思います。これは，発音の面では，日本に来て日本語を勉強している留学生，外国人の大きな障害にもなっているようです。外来語の存在というものは，それを日本語的に発音することも難しいし，もともとの意味とずれてしまっているので，ますます学習の負担が大きいということのようです。意味がずれてしまっていると申し上げましたけれども「ユビキタス」がその例ですね。「ユビキタス」と”*ubiquitous*”は，音も違っているし，意味もずれてきています。それから他にも，意味がずれているという意味では，「キャリア」というのも本来的な英語での意味はどうも伝わっていないようです。本来的に英語で「キャリア」というのは，そんじょそこらの何でもいい仕事ではなくて，かなり専門性があって一生続けられるような仕事という意味なんです。だから例えば，今，女子学生が就職するときに，選択を迫られるのは一般職か総合職かということなんですけれども，総合職というのは「キャリア」ですから，これは本当に専門性をもってずっとやっていくわけです。一般職というのは事務を主としますので，英語では「キャリア」とは

言わないわけです。差別ではなくて職種の違いなんです。英語でディスカッションをしていて，外国から来た留学生に一般職と総合職の違いを説明しかけた女子学生がいるんですけれども，内容を自分でも分かっていない。転勤があるなしの違いという認識だったんです。そこで「キャリア」の違いを説明しましたら，その女子学生の顔が引きつってきまして，そういうことだとは，よもや思わなかったと，もう少し軽く考えていたと言います。「総合職」「一般職」というのはぼかし効果ですね。言葉は生きているものですから，外来語に入ってくるなと言っても，それはどうしようもないことで，入ってくるわけです。これだけカタカナを使って，ボーダレスという，国境がないというのは，今やコンピューター，インターネットの影響が大きいと思います。外国に行っても，必ずE-mailが使えますから，日本からも来るし，日本にいても外国の知人友人といつでも連絡がとれて，即返事が来る。今までのように電話だと，ちょっと待って日本は今何時だから，とか，あっちは今，夜中だからダメか，などということが一切ないわけです。思ったときに打ってポンとやれば，向こうは読みたいときに読んですぐ返事をくれるというように，国境がなくなったような意識さえ生まれるわけなんです。それから，携帯電話というものも，今や技術はすごいですよね。このあいだ成田に行きましたが，「携帯電話の出国手続きはお済みですか」という看板が目に入って，ドコモにあわてて行きましたら，ちょっとした手続きで今までのとは違う携帯電話なんだけれども，中身がそっくりそのまま使えるようにソフトを入れてくれて，そのままの感覚で海外でも使えるという，そんな世界になってきているわけで，そういう時代に，どんどん言葉が入ってくるというのは，これはやむを得ない。そこで私たちは，それをどういう意識をもって使うかという，それだけだろうと思います。私は日本語というのは足腰の強い，結構がんこな言葉だというふうに思っています。名詞形ぐらいはどんどん入ってきても，日本語自体が崩れるということはないと思います。名詞形で入ってきた，けれども活用させて日本語の動詞として使う，というような創意工夫を日本人はする。そういうさまざまな可能性を秘めています。こういう意味では今後どうなるか面白くなってゆくと思います。しかしそれは，一つ面白い，興味のある楽しみということでおいておいたとしても，一番重要なのは先ほど申し上げました，使っている本人が損をするかもしれないということは，肝に銘じておくべきだと思います。一言だけ最後に付け加えますと例えば，ぼかしということを先ほど申しましたが，最後にそれだけ付け加えたいと思います。もう何年も前になりますが，「ガイドライン」，「日米安保のガイドラインの改定」という問題があったときに，ほとんど国内では騒ぎにならなかったんですね。私は，何でこんなに反発しないのだろう，こんな物騒な話なのにと思ったんですが。完全に推測ですが，マスコミがそれをどのように報道したかというと，日米防衛条約の指針を変更するとは

言っていないのです。「ガイドライン改定」。これは「ガイドライン」ではなくて「指針改定」と新聞に出ると，何の指針だろうと疑問に思うのですが，「ガイドライン」というカタカナだと，何となく「ガイドライン」というものがあるのだろうか，まあいいや，というような感じで，それはまあいいから，社会面を読もうというような話になって，政治面をとばす。実は日米安保条約の細部を詰める指針であって，緊急の場合，有事の際に，日本がどれだけ貢献をするか，そして民間施設をどのように提供するかまで入っている，我々の日常生活にも直結する問題であったにもかかわらず，あまり話題にならずに過ぎてしまったというのは，私はこの「ガイドライン」というカタカナ語のぼかし効果が効いたという認識をもっています。ということは，我々は，よほど気をつけていないと，カタカナ語のぼかし効果でごまかされてしまうこともありえる。今，マスコミに関しても，「メディア・リテラシー」というようなことが盛んに言われていまして，報道を鵜呑(うの)みにするのではなく，その奥にあるものを自分なりにくみ取って，中身を批判的に理解しようという試み。それから，「クリティカル・シンキング」。物事を批判的に分析して，自分の頭で考えるというようなことが，これは海外，特に欧米諸国の教育では言われてきておりますけれども，これも本当は日本語に直さなければいけないので，「批判的精神をもってものを考える」ということだろうと思いますけれども，その際には言葉に対する感性というものをかなり鋭敏に研ぎ澄まして，この言葉は本当は何なのだろうか，本当は何を意味しているのかということを，常に批判精神旺盛に分析していくようなスタンスが，必要なのではないのかなと思います。今までのようにおっとりと言葉をただ受け入れているだけではなくて，少しそのあたりの感性を磨く必要がこのボーダレスの時代では必要なのではないかと思っております。ということで，私の話はそろそろおしまいにさせていただきまして，皆さまとご一緒にいろいろな質問を受けたいと思います。

●質疑応答

山田　どうもありがとうございました。それでは先生方に前に座っていただきまして，寄せていただいた御質問を，これから 30 分かけてやっていきたいと思います。どうぞお座りください。先ほど私が司会をしている中でホチキスを「ステープル」と言い換えているのはなぜかということですが，これはＮＨＫのドラマの中でミルクが出てくると，雪印なのか小岩井なのか分からないようになっているような意味で，商標を避けたという面もございますので御理解くださいませ。それから，いろいろな御質問をいただいて，先生方にお一人ずつお話を伺いたいのですが，皆さまが，最近目にしたり耳にしたりし

た外来語で意味の分からなかったことがありましたら挙げてください。「先生方でも分からない『何，これ』というのがありますか」というような御質問もいただいています。それから前置きになりますけれども，外来語とは少し話題が違うものについてもいただいております。これは，私どもの研究所宛の御質問ということで，今度改めて質問していただくということで，外来語のことを先に取り上げさせていただきますので，どうぞ御容赦ください。それから御意見をいただいたものの中には，所長宛の御意見というものがありました。これはまだ見せていませんが，必ず伝えておきます。３人の先生方に並んでいただきましたので，直接の話を先にしたいと思います。まず，田中研究員と佐竹先生にもですが，「外来語の分かりにくい分野と言い換えてほしい分野というのが必ずしも一致しない，というお話がお二人の中にあったんですが，それは一致しないのはなぜだと考えますか。」という質問です。

田中　分かりにくいものではコンピューター関係，言い換えてほしいのが医療・福祉関係。医療･福祉関係はやはり必要としている情報として，どんな人でもその言葉が分からないと，それはその生きていく上で非常に困るということで一致しない結果が出ているんだと思います。

佐竹　コンピューター関係の言葉が分かりにくいけれども，言い換えなくていいというのはやはり，諦めているのですね。だって，あれは分かりませんもの。言葉が分からない以上に，内容が分かりませんね。私も一応パソコンらしきものを使っていますが，実態がまず分かりません。分からないところにもってきて分からない言葉が来るので，言い換えても分からないという諦めが，たぶんコンピューターに関してはあるのではないか。３位に落ちたというのは私の個人的な分析でしかありませんが，私自身も諦めてマニュアルなんかも読んでも分からないので，やはり多くの方もそんな考えをお持ちなのではないかと思います。

山田　今日は，質問者と回答者とのやりとりは難しいのではないかと思いますので，一応先に進ませていただきます。田中研究員への質問ですが，「外来語，和製英語，カタカナ語の定義の違いについて教えてください」。それから，別な方は「外来語と外国語の違いについて」。これは他のお二方にもあったと思いますが。まずそのことをお願いいたします。

田中　まず外来語と外国語の違いですが，外来語というときには日本語の中に入ってきているものということで考えています。外国語という場合は日本語ではないわけです。個々の単語に関して，外来語と言いますけれども，それが英語起源であっても日本語として使われていけばそれは外来語，ということになります。私の話の中で，「キュレーター」とか「オーセンティシティー」とか，非常に聞いたことのない言葉は，「誰にも

分からない外来語」と言いましたが，それは外国語ではないかという御質問も先ほど質問票にありましたけれども，「キュレーター」も「オーセンティシティー」も実際に行政白書には何度か使われています。そうしますと，それは日本語の文脈での日本語の行政が国民に向けて使ったということで，その段階で日本語の中の外来語ということになります。そのような「キュレーター」というのは，博物館の学芸員の中で格上の学芸員を指す言葉です。博物館の質を上げていくために「キュレーター」という存在がこれからの日本に必要であるということで，国の行政で「キュレーター」という言葉を使って施策をしているわけですけれども，そういう言葉は，今は誰にも分からないですが，しかし日本語として必要なので取り入れつつあるということになります。それは非常に分かりにくい段階で「誰にも分からない外来語」と申し上げたんですが，「キュレーター」というものが大切な概念ということで日本語に取り入れるとした場合，それを適切な日本語に置き換えるのか，それとも，説明をきちんとしてその普及に努めていくのか，そのいずれかが必要になるということです。それから，和製英語ですけれども，これは，日本で作られた英語，例えば，野球の「ナイター」とか。これは英語にはありません。あるいは，日本語で独自の使われ方になってしまった言葉を和製英語と言うこともあります。これは外来語の仮区分として，英語にさかのぼれない言葉を和製英語というふうに言います。何語に起源をもつ言葉かということもありますので，我々は和製語というふうに言って区別することがあります。それからカタカナ語ですが，これはカタカナで書かれた言葉ということでカタカナ語といいます。最近は外来語という言い方よりも，カタカナ語という言い方のほうが親しまれているように思います。外来語と言いますと外からきた言葉ですので，広く言えば中国から古代・中世・近世と入ってきた漢語を含むこともあります。カタカナ語という場合は，その漢語等を省いて，英語とヨーロッパの言語から入ってきた言葉だけを指して言うこともあります。外来語委員会では，日本語の語彙（い）の中での外来語ということへの対応を考えるために「外来語」という言い方をしているところです。

山田　佐竹先生の立場から，今の定義については何かお話がありますか。

佐竹　鳥飼先生は「カタカナ語」をお使いになっていましたね。「外来語」というほうが今は広いかなと思います。

鳥飼　英語が外来語化して「ハイテク」のようにカタカナ語になるので，カタカナ語というふうにいたしました。

山田　ありがとうございました。では次は，言葉についてですけれども田中研究員へ。

「「フォーラム」という言葉は，日本語に言い換えられないでしょうか。シンポジウム

はどうですか。」という御質問。それからもう一つ。お答えに関連があると思いますが，「言い換え提案のときに，まず先に極力外来語を使わないようにと宣言をすべきなのではないのか。研究所の立場としては，どうなんでしょうか。」ということも質問にいただいております。合わせてお願いいたします。

田中　「フォーラム」については必ず質問が出ると思って来ました。委員会では発表した言葉以外にも外来語を検討しておりまして，結論が出たものだけを発表しております。ですからその発表過程の中で「フォーラム」も検討したことがございます。例えば「ことばフォーラムは，「ことば広場」「ことばの交流広場」，こういうことを一応候補として考えたのですが，「フォーラム」というのは，もともと広場という意味でそこにいろいろな人がやって来て意見を出し合って討論をしていくという形です。その実際にやることに照準を合わせていますと，公開の場でこういう討論をするので「公開討論会」と言い換えることができるかと思います。「フォーラム」のそれぞれ一面を取り上げた言い換え語として使えなくはないと思いました。ところがいろいろ調べてみますと「フォーラム」という言葉は非常によく使われております。頻度は非常に高いです。新聞1年分で数千回という頻度が出ております。まだ理解率は国民の半分くらいというところにとどまるのですが，今後定着していくであろう，そして語形も先ほど取り上げた「ノーマライゼーション」や，鳥飼先生が出した「インフォームド・コンセント」に比べると，非常に短くて日本語としても定着できるのではないかと思い，この言葉は使っていいのではないかと。まだ分かりにくい方もいるので説明を付けていこうというふうにしております。それから「シンポジウム」との違い，「ワークショップ」とか「パネルディスカッション」とか，こういう催し物を表す外来語がたくさんあります。その違いが分からない，分かりにくいということがやはり残っていると思います。そのあたりは今申し上げた，「フォーラム」「ワークショップ」「シンポジウム」「パネルディスカッション」これらを比較して検討していく必要があります。「ワークショップ」につきましては第2回の委員会提案で「研究集会」「創作集会」などという言い換え提案をしております。「ワークショップ」については，まだ使用頻度も高くなくて，理解度も非常に低いのでそのように提案いたしました。今後似たような催しを表す言葉がどうなってゆくか見極めながら，必要に応じて先ほどの「シンポジウム」あるいは「パネルディスカッション」，こういう言葉も検討していくことになるのではないかと思います。それから，外来語を使わないようにする，外来語委員会でそういう主張をすべきではないのか，ということですけれども，それもしているつもりです。ただ，すべて使わない，どんな場面でも使わない，どんな言葉でも言い換えればいい，というものではありません。やはり外来語でないと表せないような，コミュニケーションとして成り立たないような

場面というものがあると思います。例えば専門家同士の非常に最先端の議論をしようと思うと，その場での共通の言語の，英語を背景とした議論をしていく必要があります。その背景をもって，日本人同士が日本語で議論をするときにも，その専門性を帯びた単語に関しては外来語を使って議論する方が非常に早く，そして正確な議論ができるという場面もあります。ですから，外来語をどのような場面でどういう意図で使うのか，それに応じて使わなくてもいいものは使わないようにしましょう，しかし，使う必要があるときには使って，そしてその場に分からない人がいる場合には説明を付けましょう，こういうのが国語研究所「外来語」委員会の立場ということであります。

山田　委員の鳥飼先生は何かありますか。今の問題はよろしいでしょうか。それでは話を少し変えまして，佐竹先生のお話への質問なんですけれども，新聞の紙面別の調査をなさって御紹介くださったのですが，「新聞社は１社のものなのですか。また調査したのは，いつごろのものですか。」という具体的な質問なんですけれども。

佐竹　新聞社は，朝日・毎日・読売の３紙でございます。調査年度は 1997 年から 2000 年です。世紀末の新聞を調べたことに結果的になるのですが，毎日五つのセンテンスで，３紙，15×（休刊日を除く）357 日分のデータということになります。そんなところでよろしいでしょうか。

山田　ありがとうございました。さて，佐竹先生は表記，書き表すことを御専門となさっていらっしゃいまして，その関係の質問のお答えをいただくことにいたしました。「ヴ（ウに点々），ヴァイオリンとかですね，これは教科書ではいつ習いますか。昔習った覚えがないので。今は，どのように教えているのでしょうか。」ということなんですけれども。

佐竹　大体見当つきますけれども。実は今でも習わないのです。表記の話は今日は全くしませんでしたけれども，「外来語の表記」という基準が出されておりまして，その中では，カタカナを２種類に分けています。第１の種類は皆さんが普通に使っている「アイウエオ」の類で，これらはよく使うのでいつでもいいです。そして，第２の種類は専門的な言葉，あるいは原語に近い表記をする必要があるときに使いましょう，という２段階制になっております。ですから，小学校の教科書では，できるだけ一般の日本語に近い音になっているようなものを入れることになります。例えば，ヴ（ウに点々）の類はあとのほうになりますから，ベートーベンは「ベートー『ベ』ン」なんです。音楽の教科書では「ベートーベン」になっていますが，音楽辞典を引くとそれは教科書の世界ではないので，ヴ（ウに点々）だって出てきます。外来語の表記の問題となるとまた違った問題がたくさんあるようで，一般の人の悩みの一つは，どう書くかが大きいようでございます。

山田　関連した質問では，「新聞は縦書きなんだから，そこでカタカナを使うということはどうか。外来語は横書きでこそなじみやすいか。」ということを聞かれている方もいらっしゃいますけれども。

佐竹　外来語というよりは，外国語がなじむのではないかと思います。私は横書きの国語辞書を編集していまして，そういう立場だから横書きということではないのですが，現実には私たちの生活の中で縦書きは，新聞と小説の類，それを除くとかなり多くの部分が横書きなんです。おそらく会社でお仕事をなさっていると，ほとんど横書きで，最近は行政からもらうような賞状や感謝状なども横書きで書かれています。横書きが中心になっています。そういうことを考えますと，日本語全体が横書きにいつなっても不思議がない。ある調査では「読むのには縦書きがいい」という人の数は年代と関係がないという傾向があるようですが，新聞が横書きになったらもっと横書きが普通になるでしょうね。教科書でも，お習字と国語だけです。あとは横書きが多いです。そう考えると，横書きのほうがたぶん外来語や外国語の表記そのものが入れやすいですよね。私の生きている間は大丈夫だと思いますけども，いずれそういうことにはならないという保証はない。となれば，原語綴りのものが出てくる可能性が高いし，ある意味ではスッキリするということも言えるかもしれません。

山田　ありがとうございました。森鷗外（おうがい）の小説の表記をカタカナ語とか外来語で調べたのですけれども，初めて出てくる言葉は先ほどおっしゃった綴り字が，縦のところに立って起こしたようになっていて，それにカタカナが振ってある。次には，それがカタカナになっていたりならなかったり。次は日本語にカタカナの振り仮名だったりなかったりと，同じ小説の中でも日本語化すると外国語が外来語になっていく。わざとそういうように啓蒙したのかと思ってますけれども。それではちょっとお話を変えまして，鳥飼先生にも御質問がたくさん集まりました。「最近のテレビでオリンピックですけれども，『シンクロナイズドスイミング』と言っているのを聞きましたが，以前は『シンクロナイズスイミング』と言っていたと思いますけれども，英語が活用形まで正確に持ち込まれるという表現がこれから増加するでしょうか。」ということです。複数形止めなどの不規則な変化も日本語に入ってしまうでしょうか。もう一つの「〜ズド」について，別な方からですけれども，「『ハンディキャップドパースン』あるいは『チャレンジドピープル』という言い方を聞きました」。これは話し言葉だとこの方は思ってらっしゃいます。「これだけ国際化している社会で日本語がどういうふうになるだろうか。どんどん子供たちに伝えていきたいけれども。」ということですがいかがでしょうか。

鳥飼　昔は「シンクロ」と言っていたのが，「シンクロナイズドスイミング」と正確に言

うようになったというのは，やはり英語として意識しているからなんでしょうね。多分。どうでしょうか。こうやって日本語の中で言うと言いにくいですよね。「昨日，シンクロナイズドスイミング見た」と言うと，結構言いにくいので，「シンクロ見た。昨日のシンクロきれいだったね」みたいなことで，多分正確に言うときには”ed”を付けなければならないと分かっているから，そういう言い方が増えるでしょうけれども，言いにくいので短縮していくのではないかなと。いつまでもきちんと，いつの場合も言うのではなくて，普段は「シンクロ」というような短縮語でいくのではないかなと思います。それにしても英語を使わなければという意識が強いんだなという思いはあります，放送で，活用形まできちんと言っているということは。 二つ目の御質問というか，御意見ですけれども，これもＰＣ（ ポリティカル・コレクトネス [political correctness]）なんですね。差別にならないような言葉にしようという英語の努力の表れで，「ハンディキャップ」というのも”disabled”と言ったり，そのうち「フィジカリーチャレンジド」と。「身体的にチャレンジを受けている人」ということなんですけれども，そのまま，日本に直輸入しようと思ってもなかなかなじまないでしょうし，難しいので，私は日本語の中で工夫していくと良いように思っております。

山田　他の方からの質問で，「外来語と言われるものは，ほとんど英語からきているようです。日本語の特質として外国語（英語）を取り入れやすいように日本語自体ができているのでしょうか。他の言語は，外来語をどのように取り入れていますか。」という幅広い御質問ですが，いかがでしょうか。

鳥飼　日本語が英語を取り入れやすいのではなく，これを英語帝国主義と呼んで警戒する人もいる訳です。要するに「グローバリズム」というのは，言葉を代えて言えばアメリカ化であり，言語の面ではとにかく英語が世界を席巻していくという。これは，アメリカの国としての力の強さ，それからコンピューターの影響ということになっていますが，それを，思想的にあるいはイデオロギー的に非常に危険だと感じている人は，日本にもいます。数年前に研究社から出ている『時事英語研究』という月刊誌で，英語帝国主義論争というものが連載され，いつまでたっても決着がつかなくて，編集者が打ち切りにしましたが，そういう危機感をもっている人もいますし，世界でそういうことが今非常に大きな問題となっています。つい先週，「翻訳と異文化理解」という国際会議がソウルであったので，行ってきました。世界 28 カ国から 200 名ほどの翻訳あるいは異文化コミュニケーションの研究者が集まった会議でしたが，そこでの大きなテーマが，21 世紀におけるアイデンティティのあり方と異文化理解がどうかかわるかということで，その中では一つの大きなテーマとして，英語帝国主義というか，英語のグローバリズムがどのような影響を各国に与えていき，各国の文化，言語にどんな影響を与えるかという，

そういう報告がありました。これは日本だけの問題ではなく，各国がどうにかしなければいけないと考えている問題です。

山田　日本語の性質として外来語との付き合いの肌合いというか，そういうものについてはどうかということについては，佐竹先生どうでしょうか？

佐竹　日本語というのは，ある意味で重厚というか頑固というか，そういう面がある一方，取り入れやすさ，つまり語の面では取り入れる能力として非常に融通のきく言語ですね。そういう意味では，自分に都合のいいようにうまく取り込むという能力が，かなりしたたかなものがあると思います。

山田　ここに別な方から，和製英語が多用されることによって起こる問題について，というのがありまして，「和製英語の濫用は日本語の乱れと言えるでしょうか。」というお話があります。また「日本人は一般に英語が下手と言われていますが，原因はどうしてでしょうか」。お二人に伺ってみたいと思います。

鳥飼　結論から最初に申し上げると，和製英語というのは，「百害あって一利なし」としか言えません。日本語も汚くなるし，英語で通用するのかというと，全く英語で通用しない。それを英語だと思い込むことにコミュニケーションの危機を感じます。これは何とかしたほうがいいというふうに思っています。それと，日本語を学ぼうという，先ほどちょっと申し上げました，外国の人たちにとっても，これはとても難物です。「これは英語ではない。和製英語だ」というふうに意識して使っているならまだしも，英語だと信じて使っている，ということが問題です。英語っぽく使っても誤解されたりするという場合は，今ちょっと例が思いつかなくて残念ですが，そういう危険もあるということを覚えておいたほうがいいだろうと思います。「日本人は英語ができない」というのは思い込みですね。日本語のせいでも何でもないし，日本人はその意味では自虐的というか，「いや英語は難しいですね，どうも日本人は苦手で」というような一種，社交辞令のように言いますが，よく見てみると，かなりできるんです。やはり中高で６年間やっているわけですから基礎もあるし，あとは，どうやって使っていくかということで，このどうやって使うかというのは何語であっても難しいわけです。日本語の読み書きを勉強したって，それを日本の社会の中で使って誤解されないように流暢に話していくということは，簡単ではないので，そういう意味では，発音ですとか単に言語的な知識だけではなくて，それをどのように使うかという社会言語学的な語用論的な知識，これらは一朝一夕に身につくものではない。それは留学したら身につくかというと，そんなに簡単ではない。言葉というのは文化を背負っている。文化そのものと言ってもいいくらいなので，道具ではないと私は思います。自転車に乗るのを覚えるように簡単にいかない。何でこんなに何年やっても覚えられないのだろう，と嘆くけれど，それは，そうで

す。それだけ言葉というのは重いものであって，簡単に征服してしまおうと思う方が言語の重みをおろそかにしているのではないか，という思いがあります。

佐竹　私はちょっと違うんですが，あまり乱れというふうには捉えない，いいかげんな人間でして，それは何でそう言うかというと，外来語と外国語はやはり違うんだ，という認識があるかどうかだと思うんです。外来語を知っていたら外国語を知っているような錯覚をもちがちですが，それは違いますね。漢語が分かったら中国語が分かったのか。そういうわけではなく，外来語を知っているといっても，外国語を知っているわけではない。外国語が外来語になるには非常にいくつもの変化をしたり，ずれが生じてきたりするわけです。その認識を，まずすることです。私の場合，ちょっと先生と違うのは，あまり英語を勉強しようとしなかったものですからそのせいもあるかもしれませんが，和製英語は本当に和製英語であることが分かれば一番いいのですけれども。これは違うんだからという認識がありますから。そんなに外国語と一緒だと思わないですから。和製ではない外来語であっても，それは外国語と違うんだぞというふうに常に思って生活すべきと言うのは変ですが，普段認識していくべきだと，私は考えています。

山田　ありがとうございました。今日，企画した者としては，このようにそれぞれの立場や仕事や見方が違うと，外来語についての考え方や捉え方が違うということ，そしてそれを一つの場で，話し合ったり，考えたりする場がもてたらいいな，というふうに考えたものです。そろそろ時間が迫ってきたのでまとめにかかっていますが，例えば，今日のお話の最後のところで，何を皆さんにもって帰っていただこうか，あるいは何を考えるきっかけにしていただこうか，ということを裏で相談したんですが，そうなると，「外国語とどう付き合うか」というようなことをそれぞれの立場からまとめていただくといいかな，というふうなお話になりました。例えば，明治時代の先人が行ったように，より創造的な新語を作れないものだろうか。専門分野の専門家はもっと協調できないのだろうか，そうしたらよいのではないかという思いが，気持ちがあります。私どもの受けている質問にもこういうことがあって，外来語の言い換え提案は訳語を作っているのではないか。例えば福沢諭吉とか，中村正直とか，そういう人たちがいろいろな新しい日本語を作ったんではないか。確かに先ほど鳥飼先生がおっしゃった「ソサイエティー」の「社会」という言葉は，これは中国の学者が西洋のものを取り入れて作った漢訳の漢語ではなく，日本で作った漢語なのでそれを逆に中国に逆輸出したことになるというものも，中にはあるんですけれども。それは今，佐竹先生の分野である言語生活とはずいぶん離れた一部の専門家のところで行われたことだったりしたわけですね。訳語の問題も，この外来語の問題には入っていると思いますが，そういういろいろなレベルやいろいろな見方で，最後に，それぞれのお立場では，外来語とこれからどう付き合って

いきましょうか，ということについて何か御意見をいただきたいと思います。

田中　私の今日の話では，研究所の外来語委員会の，今やっております「言い換え提案」の立場は，発信者側が注意すべきだ，そういったことを主張し続けております。発信者側と言いますと，例えば福祉の専門家，それから，そういうものを行政として取り入れる政治家，官僚。そして，そういう情報を一般国民に伝える報道機関。一応，ここまでを外来語委員会では，主とした対象としております。しかしながら，今日お出でいただいている方も，おそらく発信者側になることはあると思います。自分の得意な分野の情報を，そうでない方に伝える，その段階でおそらく発信者側になると思います。そのときに，普通使われているからといって安易に外来語を使ってしまう。そのことが分かりにくい外来語をどんどん増やしていっている。あるいは，使用回数を増やしていっている。ちょっと批判的に言うと，「のさばらせている」ことがあると思います。その分かりにくさということを避けて，きちんと伝え合うことができるようになるには，発信者側になった段階で，その外来語にどう対応するか，それを考えながら使っていくということが重要になると思います。

鳥飼　外国語教育の立場から一言だけ。英語を話すときには英語で話す。日本語で話すときには日本語を話す。これができないと通訳者にはなれませんので，この切り替えを若い方にはぜひやっていただきたい。そして二つ目は，外国語をそのままカタカナで日本語に取り入れ，それをそのまま短くして使うということばかりしていると，言葉に対するエネルギーですとか，感性も鈍ってくる。やはり，きちんと話をする，もともとの言葉を使うということを若い世代の人には努力していただきたいと思っております。

佐竹　私は田中さんとは逆の，発信される方を中心に言いますと，やはり分かった気にならないこと。分からないことを言われたら，分からないときには分からないとはっきり言って，分かった顔をして使わないこと。真似をして使っている限り，いくら経ってもこれはだめだと思います。外来語委員会の悲しいのは，たぶんああやって新聞に出ると，あれをそのまま勉強してしまうのですね。分からないことも一生懸命勉強してしまうのですね。分からないといけないと思う，これはやはり不幸です。分かるような言い方にしようというその精神で，今，鳥飼先生がおっしゃったように「感性」だと思います。言葉を使うときの感性を，やはり磨くこと。ここから始まるのだと思います。そんなときに，分かりにくい外来語は，もし言われたら質問する。それはどういう意味で使っているのか，ということを質問する。こういったことがあれば，日本語はもっと幸せになれるのではないかなと思っています。

山田　どうもありがとうございました。今の御意見に拍手も起こっていました。今日はほんとに長い間いろいろな話題がたくさんに広がりましたけれども，私どもの会をもった

意図も分かっていただけたら嬉しいと思います。これでお開きにしたいと思います。御質問には十分に答えられなかった面もありますけれども，外来語と関連のなかったものについては改めて御質問のお電話をいただければ，こちらからお電話でできる限りの回答をいたしますので，それで許していただきたいと思います。今日は本当にどうもありがとうございました。先生方どうもありがとうございました。

＜終了＞